イグナチオの「霊操」
～4日間の心の体操～

イエズス会の創立者、イグナチオ・ロヨラ

一五三四年、イグナチオ・ロヨラは日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・サビエルら七人の同志と「イエズス会」を創立、ロヨラは初代のイエズス会総長となる。

スペイン北部のバスク地方の貴族の子として生まれたロヨラは軍人だった。フランスとの交戦で重傷を負い、療養中に「キリスト伝」や聖人の伝記を読み、「キリスト教にすべてを捧げる兵士になろう」と決意する。

イエズス会を創立する前に、カタルーニャのマンレサという洞窟で一年間、祈りと苦行の厳しい生活をし、その中で神との深い交わりを体験する。それを一冊の本にまとめたのがイグナチオの「霊操」である。

魂の体操とでもいうか、神との深い交わりを体験するテキストとしてカトリックの世界では広く知られ、サビエルらも一カ月の霊操をしている。

さて、岩国教会のバリオヌエボ神父から四日間のイグナチオの霊操の黙想会に参加しないかと手紙が届いた。何か壁にぶつかったような私の心を見据えたお誘いである。

指導司祭はロヨラと同じバスク地方出身のバラ神父（現・益田教会主任神父）。「霊操」の日本語訳を手掛けたイグナチオの霊操のスペシャリストである。場所は広島市安佐南区にあるイエズス会の長束黙想の家。妻と二人で参加した。

イグナチオの霊操は四週間にわたって行われる。司祭を志す人や修道者ならともかく、我々一般人が一カ月、黙想するのは時間的にも難しい。指導司祭の四十五分程度の講話を聞き、そのあと一人で約一時間の黙想をする。今回は四日間で十二の講話を聞き、黙想した。

ロヨラは霊操の冒頭の「原理と基礎」の中で「人間は神によって造られ、主なる神を賛美し、敬い、仕えることによって自分の救いをまっとうする」と書いている。

霊魂の救い、わかりやすく言えば、神によって造られた人間はこの世限りの命ではなく、神を賛美し、敬い、奉仕すれば、神の国の永遠のいのちを得ることができる。誰も神を見た人はいない。でもその存在「復活」を信じる、それがカトリックの信仰である。

「現代人は心が病んでいる人が多い」と言われる。ここ十年、毎年三万人を超える人が自殺することもその表れのひとつだろう。

「神」は宗教の問題で、自分には関係ないと言う人が意外に多い。果たしてそうだろうか。

長束の黙想の家の上に墓地がある。神父や修道士の墓、その中に親しかった神父の墓があった。彼もスペイン人、神にすべてをかけ、異国の日本の地で亡くなられた。黙想の際、何度か墓地を訪れた。死ですべてが終わりだろうか。

八十歳を過ぎても「霊操」の心を伝えようとする指導司祭バラ神父の情熱に頭がさがる。ロヨラが体験した神との交わりを大切にしよう。

沈黙の中での食事の際、流れてきたCD「アメイジング・グレイス（神の恵み）」が体にしみ込む。

さあ、日常生活も神への賛美と感謝のうちに過ごそう。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

バラ神父が訳したイグナチオの「霊操」